

節を名詞化する「の」「こと」の用例分析

秋本 瞳

キーワード： 「の」、「こと」、主節の述語の品詞、「の」「こと」に後続する助詞、文体

要旨

本稿の目的は、先行研究で示されている意味的な解釈とは異なる観点から「の」「こと」の使い分けを捉えなおすことができる可能性を示すことである。今回は、電子化されたテキストから用例を収集、「の」「こと」が用いられる用例の助詞や品詞といった面から、その可能性を示唆するための基礎的な資料を作成した。具体的には、用例を「の」「こと」に後続する助詞「は」「が」「を」、主節の述語として用いられる「形容詞」「動詞」「名詞」「サ変名詞」といった品詞で分類した。その結果、「の」「こと」に後続する助詞や品詞により「の」「こと」の表れやすさに差異があることが示唆された。

1. はじめに

節を名詞化する「の」「こと」は、後述するが、これまで「の」や「こと」が用いられる従属節や主節の意味的な解釈がその選択に影響を与えると論じられることが多かった。意味的に主節や従属節を解釈する際には、その方法に明確な基準がなく、個人の解釈による部分が大きい。そこで本稿では、明確な基準により「の」「こと」の使い分けを論じるために、いくつかの明確な基準として考えうる要素に着目し、用例を収集、それらが「の」「こと」の選択に関わる可能性を指摘し、これまでとは異なる観点から「の」「こと」を捉えなおすを試みる。

2. 節を名詞化する「の」「こと」

節を名詞化する「の」「こと」は(1)のように従属節を名詞として扱う際に用いられる。

(1) 最近マン島に日本の猫のような短い尻尾の猫がいる の/こと を知った。

(1) では、従属節「マン島に日本の猫のような短い尻尾の猫がいる」が「の」「こと」により名詞化され、主節に組み込まれている。

節を名詞化する「の」「こと」は、(1)のように「の」「こと」を両方用いることがで

きることもあるが、いずれかしか用いられないこともある。そして、基本的には「の」「こと」いずれかしか用いられない場合、特定の主節の述語が用いられ、主節の述語によりどちらが用いられるか決定される。

- (2) いつも朝からお隣さんが鼓をうっている の/*こと を聞いている。
 (3) その店でいつも客がおいしそうにコーヒーを飲む の を見て、いつか入ってみたいと思っていた。

(2)は、「の」は用いられるが「こと」は用いられない。主節の述語である「聞く」が知覚動詞であるため¹と考えられる。この他に「見る」などの動詞も(3)のように知覚動詞の場合は「の」のみ用いられる。しかし、この場合、あくまで「知覚動詞」として用いられることが条件で、(4)のように、「噂を聞く」という意味で用いられる、あるいは(5)のように「概観する」のような意味で用いられる場合は、(2)(3)のように知覚動詞として用いられないため「の」「こと」の判断も異なる。この場合には「の」だけでなく「こと」も用いられ、「の」の許容度が低いこともある。

- (4) 隣の奥さんが鼓を習っている の/こと は聞いていた。
 (5) 以上、蜜蜂の大量失踪の原因についていくつかの要因が挙げられている現状がある ?の/こと をみた。
 (6) 以前、この問題についての大臣の発言が問題になった *の/こと があった。

(6)は、「こと」は用いられるが「の」は用いられない。但し、「ことがある」という慣用的な表現で、「こと」「が」「ある」と分析的にわけて意味が解釈されるというよりも「ことがある」で経験を表す一つの表現となり、「こと」の自立性は低いと考えられるため、節を名詞化する「の」「こと」とは同等に扱ってよいとは考えにくい。「ことができる」「ことになる」「ことにする」などの表現も「こと」が用いられ、「の」が用いられないが、いずれも「こと」とそれ以外の要素によって、分析的に解釈して得られない、「可能」「決定」という意味を有している。これらの例は語彙化しているとも考えられ、「こと」が独立した名詞としての機能をもっているとは言えない。

以上のように「の」「こと」には、「の」「こと」両方用いられる場合、「の」「こと」のいずれかのみ用いられる場合がある。そして、それらの区別には主節の述語が大きく影響している。

3. 先行研究

久野(1973)以降、多くの研究により節を名詞化する「の」「こと」の使い分けについて考察がなされてきた。先行研究は、「の」のみ用いられる文、「こと」のみ用いられる

文、「の」「こと」両方用いられる文の三つの扱いという点から、大きく二つに分けられる。また、「の」「こと」について、大規模なデータを用いた研究も行われている。

3.1 「の」のみ用いられる文、「こと」のみ用いられる文を分け、「の」「こと」両方用いられる文もその二つの範疇のいずれかに含める立場

一つは、「の」「こと」をある基本軸でとらえ、「の」のみ用いられるのか「こと」のみ用いられるのか、またどちらも用いられるのかを段階的に判断する捉え方である。これには、久野(1973)、Josephs(1976)をはじめ、多くの先行研究があてはまる。以下、久野(1973)の例を挙げる。

- (7) 私は太郎が花子をぶつ の/*こと を見た。
(8) 私は太郎がピアノをひく の/*こと を聞いた。

((7)(8)は久野 1973:140)

久野(1973)は、(7)(8)の「見る」「聞く」²など主節の動詞が「の」を要求するとし、「の」の性質を前提として考察をしている。「こと」についても同様に「こと」の性質があるとしている。Josephs(1976)もその点では同様であり、以下のように「の」「こと」についての性質が述べられている。

表1 先行研究における「の」「こと」の捉え方

	の	こと
久野(1973)	具体的な動作・状態・出来事	抽象化された概念
Josephs(1976)	directly perceived, simultaneously occurring event, etc.(直接知覚される、同時に起こる出来事等)	abstractly perceived, nonsimultaneous event, etc.(抽象的に知覚される、同時に起こらない出来事等)

しかし、これらの捉え方に従う場合、意味解釈的な側面があり、客観的に捉えきれない面がある。こうした捉え方は、なぜその文に「の」「こと」が用いられているのかを説明することはできる。しかし、「の」「こと」の文が産出される際に、そのどちらを用いるのかを決定する際の条件として十分とはいえないとも考えられる。

- (9) 相手側がなかなかプロジェクトを進めることができていない の/こと がわかり、こちらも対応策を考えているところだ。

(9)は「の」「こと」どちらも用いられるが、久野(1973)によれば、「の」が用いられた

場合には「具体的な」「出来事」を表し、「こと」が用いられた場合には「抽象的な」「概念」を表すと捉えられる。しかし、「プロジェクトが進めることができていない」「の」と「プロジェクトを進めることができていない」「こと」との文の解釈の差異を「の」「こと」以外の部分から見出すことは困難であると考えられる。また、「具体的」な「出来事」を表すことを意図して、「の」が用いられ、「抽象的」な「概念」を表すことを意図して「こと」が用いられているのか否かも不明である。

その曖昧さの原因として「具体」「抽象」という概念が、用例によって解釈が一意ではないということが挙げられる。例えば、(2)(3)の知覚動詞の例のように「実際に起こっている」「具体」的事柄として認識されるため、「の」が用いられるということと、(4)(5)のように客観的に事態が起こっていることに対して、それを「具体的」なものとして認識し、「具体」的事柄として扱うために「の」が用いられるというのでは、違いがある。(2)(3)は、事態そのものが起こっているため「具体」としているが、(4)(5)は起こった事実を「具体的」なものとして認識するのか「抽象的」なものとして認識するのか、という事態に関わる参加者の認識の違いによって「具体」「抽象」を区別している。

さらに、前者の「具体」「抽象」の捉えかたは、ある程度明確に「具体」「抽象」を判断できるが、後者の「具体」「抽象」の捉えかたには、明確な基準を見出すことが難しいため、その点前者よりも問題があると考えられる。

3.2 「の」のみ用いられる文、「こと」のみ用いられる文、「の」「こと」両方用いられる文を分ける立場

二つ目は、「の」のみ用いられる文、「こと」のみ用いられる文、どちらも用いられる文を分ける立場である。これは、橋本(1990)などがあてはまる。以下、橋本(1990)の例を挙げる。

- (10) 太郎は飛行機がふもとに墜落する の/*こと を見た。
- (11) 男はきのう同じ場所にいた の/こと を隠した。
- (12) 彼は車で迎えにくる ??の/こと を申し出た。

((10)(11)(12)は橋本(1990)より抜粋)

橋本(1990)では、(10)が、「の」の「専用文」であり、「の」の「専用文」の場合には、主節と従属節との間に「同時性」「同一場面性」といった「意味的な密接性」があると述べている。また、(11)は「の」「こと」の「両用文」で従属節の意味役割が「《対象となることから》」であるという特徴を持つとし、前提として橋本(1990)では「の」「こと」「両用文」の「の」が用いられる文と「こと」が用いられる文とを区別せずに分類している。(12)は「こと」の「専用文」であり、従属節が「《生産されることから》」であるという特徴を持つとされている。このように橋本(1990)では、用例を三つに

分類している。

3.3 大規模な電子化されたデータを用いた研究

3.1、3.2 のような使い分けに関する先行研究とはまた異なる観点から、近藤(1997)は、大規模な電子化されたデータを用い、「のが」「ことが」が用いられる用例を観察し、中古日本語の「準体」との比較を行っている。その結果、現代日本語における「のが」の使用が「ことが」と比較して分布に「強い制限」があり、「非対格自動詞」「形容詞」「名詞」の「主語」にしかならないと述べている。さらに、「のを」節が「対象」を表すものであるため、中古日本語の「準体」と同様に「対象」を表す、「自動詞の主語と他動詞の目的語とが同様の扱いを受ける」(近藤 1997:134)「能格的分布」を示しているとした。近藤(1997)は、「のが」「ことが」の用例のみ扱い、その目的も本稿とは異なる。しかし、その際に、後続する助詞については「が」のみであるが、「の」「こと」に後続する助詞や品詞に目を向け、用例を抽出している。近藤(1997)で得られた結果から、助詞や品詞のような明確なカテゴリーに属するものを手がかりに、電子化されたデータから用例を検索することが可能であることが示された。実際に、「の」「こと」の選択に主節の述語が影響を与え、またそれに伴い、「の」「こと」の後に続く助詞もその選択に関係があることが考えられる。

4. 用例の収集

4.1 用例の収集方法

節を名詞化する「の」「こと」の選択に、後続する助詞及び主節の述語の影響があるかどうかを見るため、本稿はコーパス⁴を用いて用例を検索、集計した。コーパスを利用することにより、データは大量かつ客観的な資料となることが期待される。

用例は新潮社から発行されている CD-ROM「新潮文庫の 100 冊⁵」(以下、「新潮」)を用いた。「新潮」には翻訳されたテキストも含まれるため、今回は日本文学のみ用いた。その結果用例の総数は 435,212 例である。

用例の抽出には KH Coder⁶を用いた。KH Coder は、形態素解析されたデータを分析することができる。その際、茶笥の辞書を IPADIC⁷ から、UniDic⁸に変更した⁹。さらに、品詞の設定を「助詞」「助動詞」が検索できるように変更した¹⁰。

KH Coder の「KWIC コンコーダンス」で用例の検索を行った。検索は以下のように行った。今回の分析対象は、「従属節+「の」/「こと」+助詞+主節述語」というパターンとして捉えられるが、検索する助詞は「は」「が」「を」、主節の述語は「名詞」「形容詞」「形容動詞」「動詞」に限定した。助詞をこの三種類にしたのは、「に」「から」などを含めると、慣用的な表現や固定化した表現を含む可能性があるということを考慮したためである。また、主節の述語は、この四種類とし、UniDic を用いて該当するものを検索した。

こうした設定のもとで、「の」は品詞を「準体助詞」、「こと」は品詞を「名詞 B」と指定し、追加条件として「の」「こと」に助詞「は」「が」「を」いずれかが後続し、さらにその後に「サ変名詞」「形容動詞」「名詞 B」「名詞 C」「名詞」「動詞 B」「動詞」「形容詞 B」「形容詞」のいずれかが続くものを検索した。検索パターンは、54通りとなる¹¹。

4.2 収集した用例について

用例は「の」の用例を 6267 例、「こと」の用例を 8764 例収集した。

ここで、収集した用例は、機械的に集められたものであり、「の」「こと」いずれかのみ用いられるものであるか、いずれも用いられるものであるかは、用例を収集しただけでは把握できない。そのため、ここでは収集した用例から「の」「こと」それぞれ 100 例を無作為に抽出し、それらがいずれも用いられるものであるのかを検討した。

その結果、抽出した「の」100例のうち92例は、「の」「こと」いずれも用いられる用例であった。しかし、いずれかしか選択されない、主節の述語に知覚動詞が用いられた「の」の用例は8例含まれていた。したがって、「の」については、「の」の用例全体で500例程度、「の」のみ用いられる、知覚動詞の用例である可能性がある。一方、「こと」の用例100例のうち、「ことがある」などの「こと」が用いられる固定化した表現が用いられた用例は含まれていなかった¹²。

また、以下例を挙げるように、「の」節全体が名詞として機能し、節内に含まれる名詞として解釈される場合¹³、それらを、従属節を名詞化する「の」「こと」の範疇に含める立場とそうでない立場がある。「の」100例中7例がその例である。

- (13) (前略)太郎は目玉焼きの黄身がさらに広がった の をきれいにパンにつけて、
こすり取るようにして食べてしまったが、(後略)

(13)は、「パン」につける「もの」に相当するものが「目玉焼きの黄身がさらに広がったの」であり、(1)とは区別する立場もある。しかし、本稿では、それらの用例も「の」の用例に含まれている。

5. 集計結果

収集した用例の一部を以下に示す。

- (14) 編集者である彼が、私の知らないそのようなことまで知っている の が不思議だった。
- (15) 記述者があたかも自分が体験しているようなところへ身を乗りだしている こと を意味する。

(14)は、「の」の用例、(15)は「こと」の用例であるが、いずれも「の」「こと」を入れ替えてもある程度許容されると考えられる。

以上の検索のクロス集計表が表2である。図1は、表2を図示したものである。

表2 「の」の品詞、助詞の集計結果

の		品詞					合計	
		名詞	形容詞	形容動詞	動詞	サ変名詞		
助 詞	が	度数	608	260	450	487	61	1866
		%	9.70%	4.10%	7.20%	7.80%	1.00%	29.80%
	を	度数	253	55	97	1701	163	2269
		%	4.00%	0.90%	1.50%	27.10%	2.60%	36.20%
	は	度数	967	242	566	235	122	2132
		%	15.40%	3.90%	9.00%	3.70%	1.90%	34.00%
合計	度数	1828	557	1113	2423	346	6267	
	%	29.20%	8.90%	17.80%	38.70%	5.50%	100.00%	

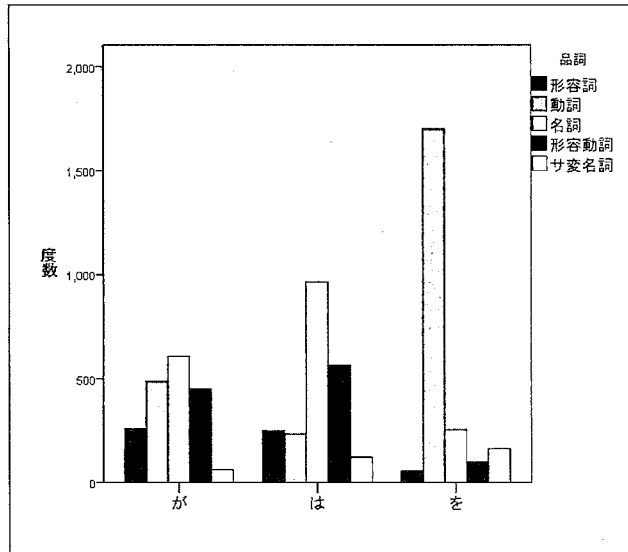


図1 「の」に後続する助詞と品詞

表2の集計結果の助詞毎の合計はそれぞれ「が」29.80%、「を」36.20%、「は」34.00%で、大きな差があるとは判断しにくい。品詞毎の合計は、名詞29.20%、形容詞8.90%、

形容動詞 17.80%、動詞 38.70%、サ変名詞 5.50%と品詞によって全体に占める割合が大きく異なる。名詞と動詞の割合が特に高いことがわかる。その他、形容動詞、形容詞、サ変名詞が続く。

表のそれぞれの値については、助詞は「を」で品詞は「動詞」の割合が 27.10%、助詞「は」で品詞は「名詞」15.40%の割合が他よりも大きい。これらの結果が、図1からも読み取れる。

表3は、「こと」のクロス集計結果である。図2は、表3を図示したものである。

表3 「こと」の品詞、助詞の集計結果

こと		品詞					合計	
		名詞	形容詞	形容動詞	動詞	サ変名詞		
助詞	が	度数	232	241	209	560	111	1353
		%	2.60%	2.70%	2.40%	6.40%	1.30%	15.40%
	を	度数	540	79	203	4356	590	5768
		%	6.20%	0.90%	2.30%	49.70%	6.70%	65.80%
	は	度数	434	120	358	625	106	1643
		%	5.00%	1.40%	4.10%	7.10%	1.20%	18.70%
合計	度数	1206	440	770	5541	807	8764	
	%	13.80%	5.00%	8.80%	63.20%	9.20%	100.00%	

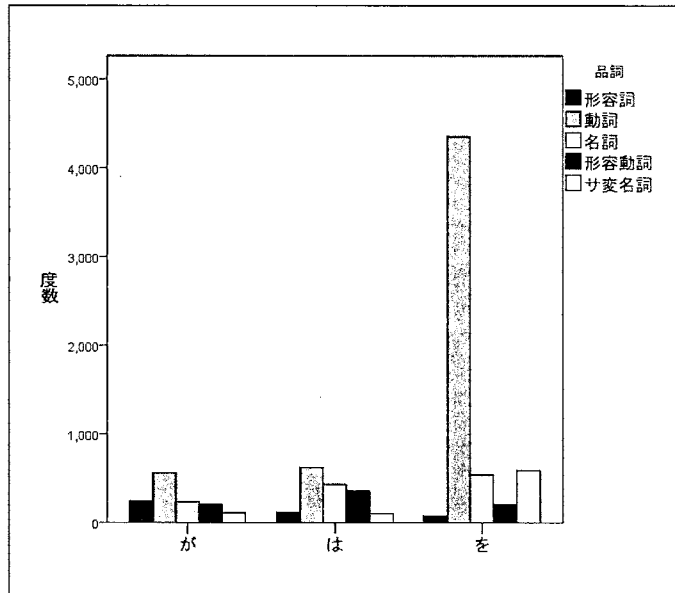


図2 「こと」に後続する助詞と品詞

助詞の「合計」をみると、「が」15.40%、「を」65.80%、「は」18.70%となっており、「を」が半数以上の割合を占めている。品詞の「合計」は、名詞13.80%、形容詞5.00%、形容動詞8.80%、動詞63.20%、サ変名詞9.20%であり、動詞の割合が半数以上を占める。表のそれぞれの値は、助詞が「を」で品詞が「動詞」の場合に49.70%を占めている。「こと」の用例はおよそ半数が「を」+「動詞」の用例であることがわかる。図2においてもその結果が確認できる。

さらに、「の」「こと」の結果を比較すると、「こと」は、「を」「動詞」といった要素を持つ用例が多くみられ、この組み合わせは用例の大部分を占める。「を」「動詞」といった要素が「こと」の選択にいくらか大きく作用しているとも考えられる。その一方で、「の」は、図1をみてわかるように「を」「動詞」が用いられた用例が「こと」同様、多いように見えるが、「こと」に比べその傾向はそれほど顕著ではない。名詞や形容詞、他の助詞についても、「こと」と比較し、ある程度の割合で用いられている。「の」「こと」いずれも「を」「動詞」の組み合わせが最も多いとも言えるが、「の」の場合、「名詞」の割合も一定の割合を占め、「こと」よりも、用例のパターンの偏りが小さいとも言える。

図1図2の結果からは、助詞に続く品詞のパターンが異なることがわかる。図1「の」は、「が」は「名詞」「動詞」「形容動詞」の順に多く、「は」は「名詞」「形容動詞」の順に多い。「を」は、「動詞」「名詞」の順だが、「動詞」と「名詞」の割合には度数にして1000以上の開きがある。「の」は、「が」「は」が、「名詞」が最も多く、「を」が動詞が最も多いというパターンである。図2「こと」は、「が」「は」「を」いずれも「動詞」が最も多いパターンであるので、その点、「の」「こと」で結果が異なる。

さらに、今回は、「の」「こと」の選択にいくらか寄与することが予想される品詞や助詞との結びつきを感覚的に示すことを目的とし、「の」「こと」、品詞、助詞を変数として扱い、クラスター分析(ward法/平方ユークリッド距離)を行った。その結果をデンドログラムで示す。用例は、「の」「が」「形容詞」のように、「の」「こと」、品詞、助詞の三つの変数がそれぞれ一つずつ割当てられ、それらが分析されている。

図3は「の」「こと」と助詞のデンドログラム、図4は「の」「こと」と品詞のデンドログラムである。

図3では、「こと」と「を」、「の」と「が」が一つのまとまりとしてとらえられ、そして「の」「が」のまとまりにさらに「は」が加わる形で一つのクラスターとなる。しかし、「の」を含むクラスター、「こと」を含むクラスターの距離は離れている。このことから、「こと」「を」、「の」「が」「は」がそれぞれのまとまりの中で距離が近く、これらのそれぞれのまとまりが共に生じやすいことが示唆される。

図4からは、「こと」と動詞の距離が近く、「の」は、形容詞、サ変名詞、形容動詞、名詞といったその他の品詞のクラスターと距離が近く、一つのクラスターを形成する。この結果から「こと」と動詞、「の」とその他の品詞が、それぞれ共に生じやすいこ

とが考えられる。

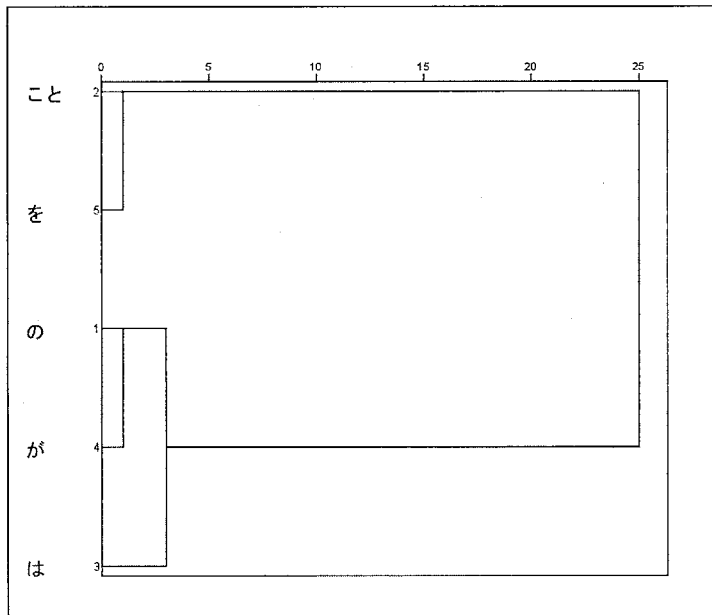


図3 「の」「こと」、助詞のデンドログラム

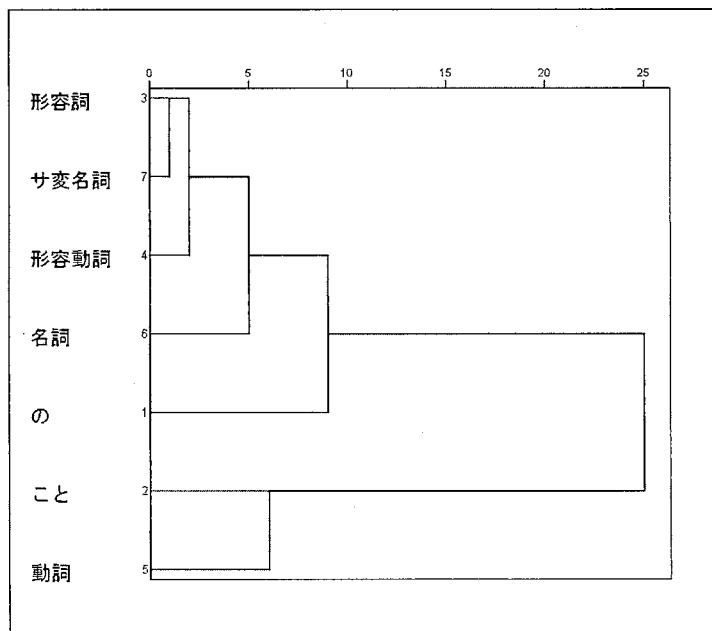


図4 「の」「こと」、品詞のデンドログラム

今回の集計から、述語や助詞といった要素が「の」「こと」の選択に関わりうることが示された。それら個々の要素は、それぞれ「の」「こと」の選択に何らかの影響を与えていると予想することができるが、そのどれもが決定的な要因とはいきえず、それらが各々何割か寄与していると考えられる。ここでは、これらの因果関係について明らかにすることはできなかったが、それは今後の課題としたい。しかし、「の」「こと」いずれも用いられる用例について、「の」「こと」いずれかしか用いられない用例とは異なる、「の」「こと」の選択に関わる要素が存在することは示唆できた。

6. まとめ

本稿は、節を名詞化する「の」「こと」の使い分けについて、従来の意味的解釈に依らず、明確な基準として機能し得る、後続する助詞や主節の述語の品詞といった要素が「の」「こと」の選択に関わる可能性を示唆した。電子化されたデータから用例を収集した結果、「の」「こと」では、助詞や述語の表れ方に差異があり、これらの要素が「の」「こと」の選択に寄与している可能性があることが明らかになった。

7. 今後の課題

今回のデータ収集、集計には、いくつかの課題も残されている。

まず、「の」「こと」の用例が、様々な種類のものが混在しており、考察を進めるにはそれらの分類が必要になると考えられる点である。また、助詞や品詞も全てを対象にしていない。包括的な調査をし、「の」「こと」の選択についての条件を明らかにするために用例についてさらに考慮することが必要である。

また、助詞や品詞以外の要素が「の」「こと」の選択に関わる可能性もある。例えば、書き言葉、話し言葉、といったスタイルの差異が、「の」「こと」の選択に関わる可能性が考えられる。

「の」「こと」に後続する助詞が現れない無助詞の場合も、今回扱うことができなかったが、今後の課題としたい。

以上、課題を挙げたが、「の」「こと」の使い分けについて、今後包括的に捉えるために、用例の質、量を整備し、可能な限り様々な観点から、用例を収集、分析を行いたい。

注

¹ 以下、節を名詞化する「の」「こと」を「の」「こと」と表す。

² 主節の述語が知覚動詞である場合「の」が用いられることは、奥田(1960)、Josephs(1976)などで言及されている。奥田(1960)によれば「みる、きくのような感性的活動を表す動詞は、『～のを』という形をとる」とされ、Josephs(1976)では知覚動詞が主節の述語として用いられる場合、「の」が用いられ、「こと」が用いられないと述べられている。

³ 久野(1973)、Josephs(1976)は「見る」「聞く」などの知覚動詞が主節述語の文と、それ以外

の文を区別し、「の」「こと」の使い分けを論じていない。しかし、上述の通り、知覚動詞の場合、「の」のみ用いられると断言でき、むしろ、そちらが明らかに「の」が選択出来る例として「の」「こと」のあらゆる用例の中で、例外的で、「の」「こと」の差異を論じる際に論拠となるような中心的な位置づけがなされない、との考え方も可能である。

⁴ 本文で用例収集した新潮は書き言葉のコーパスである。しかし、本来であれば、様々なスタイルのコーパスを用意すべきである。今回は、用例数の問題で、収集結果には含めなかったが、会話をデータ化した、東京外国語大学宇佐美まゆみ研究室より配布されている『BTSによる多言語話し言葉コーパス』（以下「BTS」）の集計結果を付録として挙げる。BTSは話し言葉のスタイルをとっている。BTSについては

<<http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/usamiken/corpora.htm>>。

⁵ 「新潮 100」のリストについては「CD-ROM 版 新潮文庫の 100 冊」

<http://homepage1.nifty.com/mshibata/s100.htm#tool_s100s32>にある。

⁶ KH Coder は立命館大学の樋口耕一氏により開発されたソフトで、

<<http://khc.sourceforge.net/>>からダウンロードできる。

⁷ KH Coder のデフォルトの設定では、使用する茶笥の辞書が IPADIC になっており、「の」「こと」の用例を検索できない。IPADIC については<<http://sourceforge.jp/projects/ipadic/>>を参照。

⁸ UniDic については、

<https://www.tokuteicorpus.jp/dist/modules/system/modules/menu/main.php?page_id=1&op=change_page>を参照。

⁹ UniDic は、揺れがない齊一な単位で設計されている「短単位」を採用しているため、今回の検索に適した辞書である。また、UniDic では、ひらがな表記の形容詞、動詞、名詞を「形容詞 B」、「動詞 B」、「名詞 B」とし、一文字の名詞も「名詞 C」としているが、今回は区別する必要がないため、結果として形容詞、動詞、名詞として扱った。

¹⁰ KH Coder の茶笥の辞書変更については、

<http://koichi.nihon.to/cgi-bin/bbs_khn/khef.cgi?no=525&mode=allread>に方法が紹介されている。

¹¹ 用例を収集していく中で「というの」「ということ」といった例や「そういうの」「あいうこと」などの例もあったが、用法を考える上で名詞化する「の」「こと」とはまた別の議論が必要になることを考慮し、除いた。「というの」「そういうの」といった例は、「の」の用例は 3924 例、「こと」の用例は 4626 例ある。

¹² 「の」「こと」いずれも用いられる文だけでなく、知覚動詞の用例等含んで検索してしまうのは、UniDic によってそのように分類されてしまうためである。

¹³ “Head-internal relative clause”に相当する節である。

参考文献

- 宇佐美まゆみ監修(2007)『BTS による多言語話し言葉コーパス—日本語会話(数字)(2007年版)』東京外国語大学大学院地域文化研究科 21 世紀 COE プロジェクト「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」
- 奥田靖雄(1960)「を格のかたちをとる名詞と動詞のくみあわせ」『日本語文法・連語論(資料編)』むぎ書房
- 久野 暉(1973)『日本文法研究』大修館
- 近藤泰弘(1997)「『の』『こと』による名詞節の性質」『国語学』190号 pp.132-142
- 橋本 修(1990)「補文標識の『の』『こと』の分布に関わる意味規則」『国語学』163号 pp.1-12
- Josephs, Lewis. (1976) "Complementation." M.Shibatani ed. *Syntax and Semantics*, vol.5, Academic press, New York, pp.307-370.

用例出典

「新潮100」の日本文学のリスト

赤川次郎『女社長に乾杯!』、阿川弘之『山本五十六』、芥川龍之介『羅生門・鼻』、安部公房『砂の女』、有島武郎『小さき者へ・生れ出づる悩み』、有吉佐和子『華岡青洲の妻』、池波正太郎『剣客商売』、石川淳『焼跡のイエス・処女懐胎』、石川啄木『一握の砂・悲しき玩具』、石川達三『青春の蹉跎』、泉鏡花『歌行燈・高野聖』、五木寛之『風に吹かれて』、伊藤左千夫『野菊の墓』、井上ひさし『ブンとフン』、井上靖『あすなる物語』、井伏鱒二『黒い雨』、遠藤周作『沈黙』、大江健三郎『死者の奢り・飼育』、大岡昇平『野火』、開高健『パニック・裸の王様』、梶井基次郎『檸檬』、川端康成『雪国』、北杜夫『楡家の人びと』、倉橋由美子『聖少女』、小林秀雄『モーツァルト・無常という事』、沢木耕太郎『一瞬の夏』、椎名誠『新橋烏森口青春篇』、塩野七生『コンスタンティノーブルの陥落』、志賀直哉『小僧の神様・城の崎にて』、司馬遼太郎『国盗り物語』、島崎藤村『破戒』、曾野綾子『太郎物語』、高野悦子『二十歳の原点』、竹山道雄『ビルマの豎琴』、太宰治『人間失格』、立原正秋『冬の旅』、田辺聖子『新源氏物語』、谷崎潤一郎『痴人の愛』、筒井康隆『エディプスの恋人』、壺井栄『二十四の瞳』、中島敦『李陵・山月記』、夏目漱石『こころ』、新田次郎『孤高の人』、野坂昭如『アメリカひじき・火垂るの墓』、林芙美子『放浪記』、樋口一葉『にごりえ・たけくらべ』、福永武彦『草の花』、藤原正彦『若き数学者のアメリカ』、星新一『人民は弱し官吏は強し』、堀辰雄『風立ちぬ・美しい村』、松本清張『点と線』、三浦綾子『塩狩峠』、三浦哲郎『忍ぶ川』、三木清『人生論ノート』、三島由紀夫『金閣寺』、水上勉『雁の寺・越前竹人形』、宮沢賢治『銀河鉄道の夜』、宮本輝『錦織』、武者小路実篤『友情』、村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』、森鷗外『山椒大夫・高瀬舟』、柳田国男『遠野物語』、山本周五郎『さぶ』、山本有三『路傍の石』、吉村昭『戦艦武蔵』、吉行淳之介『砂の上の植物群』、渡辺淳一『花埋み』

付録: BTS の集計結果

BTS の用例は新潮に比べ、用例数が少なく、比較するには適当とはいえない資料であるが、今後「の」「こと」の使い分けについて、文体の観点から考察を進めるための参考資料として挙げたい。

BTS の結果は、新潮の結果と異なる点がある。五つの点にまとめた。

1. 「の」「こと」いずれも形容動詞、サ変名詞の用例の割合が少ない。
2. 「の」は「を」の用例が「が」「は」の用例に比べ割合が低かった。「を」の用例は、どの品詞が用いられても10%を超えるものがない。
3. 「こと」は、「は」の用例が「が」「を」の用例に比べ、割合が低かった。助詞が「は」で、品詞が動詞の用例は中でも12.90%だが、それ以外の品詞のものは他と比べ少ない。
4. 新潮は「こと」「を」、「こと」「動詞」の距離が近いというクラスター分析の結果が出たが、BTSは、助詞については異なった結果が出た。「こと」「を」、そして「が」がクラスターを形成し、それとは別に、「の」「は」でクラスターを形成している。「が」の結果が異なる。
5. BTSの「の」の結果は、BTS「こと」、新潮「の」、新潮「こと」の結果と異なる。しかし、「を」「動詞」が用いられている用例以外に、「が」「は」「名詞」「形容詞」などが用いられている用例も見られる点は、新潮の「の」と同じ特性をもっているとも言える。

表1 BTSの「の」の品詞、助詞の集計結果

の			品詞					合計
			名詞	形容詞	形容動詞	動詞	サ変名詞	
助詞	が	度数	7	13	10	9	2	41
		%	7.80%	14.40%	11.10%	10.00%	2.20%	45.60%
	を	度数	1	0	0	5	3	9
		%	1.10%	0.00%	0.00%	5.60%	3.30%	10.00%
	は	度数	11	10	3	14	2	40
		%	12.20%	11.10%	3.30%	15.60%	2.20%	44.40%
	合計	度数	19	23	13	28	7	90
		%	21.10%	25.60%	14.40%	31.10%	7.80%	100.00%

表2 BTSの「こと」の品詞、助詞の集計結果

こと		品詞					合計	
		名詞	形容詞	形容動詞	動詞	サ変名詞		
助詞	が	度数	6	11	1	16	2	36
		%	7.10%	12.90%	1.20%	18.80%	2.40%	42.40%
	を	度数	3	0	0	27	4	34
		%	3.50%	0.00%	0.00%	31.80%	4.70%	40.00%
	は	度数	1	1	2	11	0	15
		%	1.20%	1.20%	2.40%	12.90%	0.00%	17.60%
合計	度数	10	12	3	54	6	85	
	%	11.80%	14.10%	3.50%	63.50%	7.10%	100.00%	

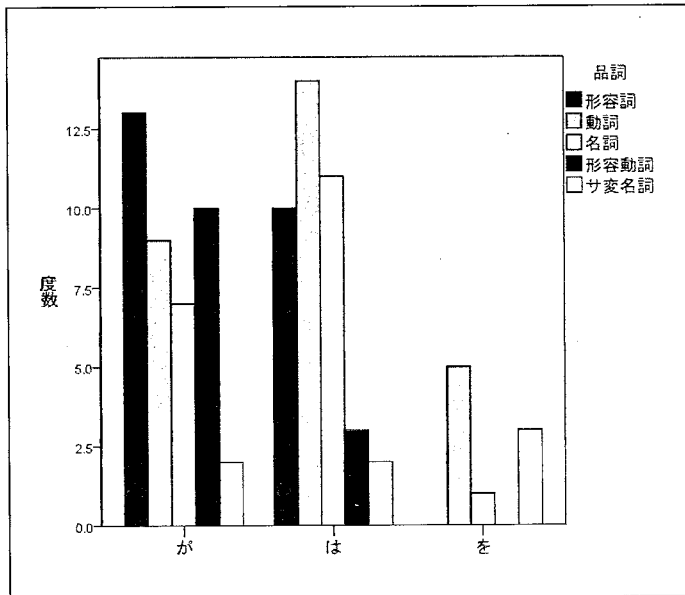


図1 BTSの「の」に後続する助詞と品詞

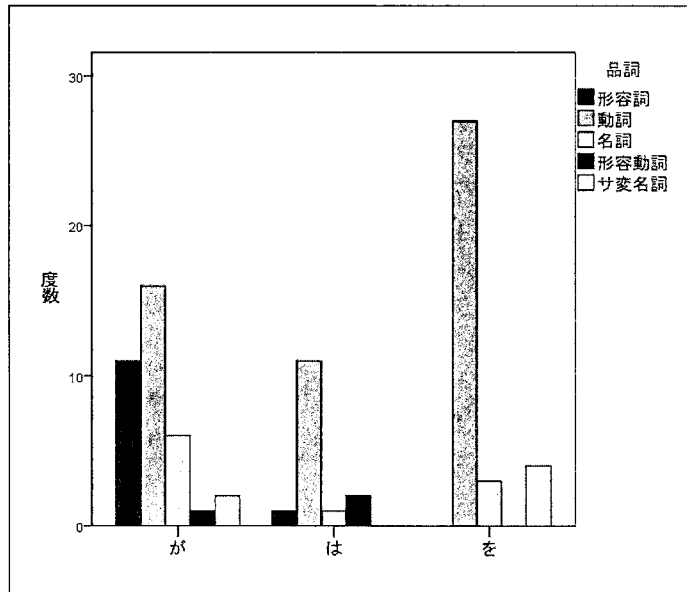


図2 BTSの「こと」に後続する助詞と品詞

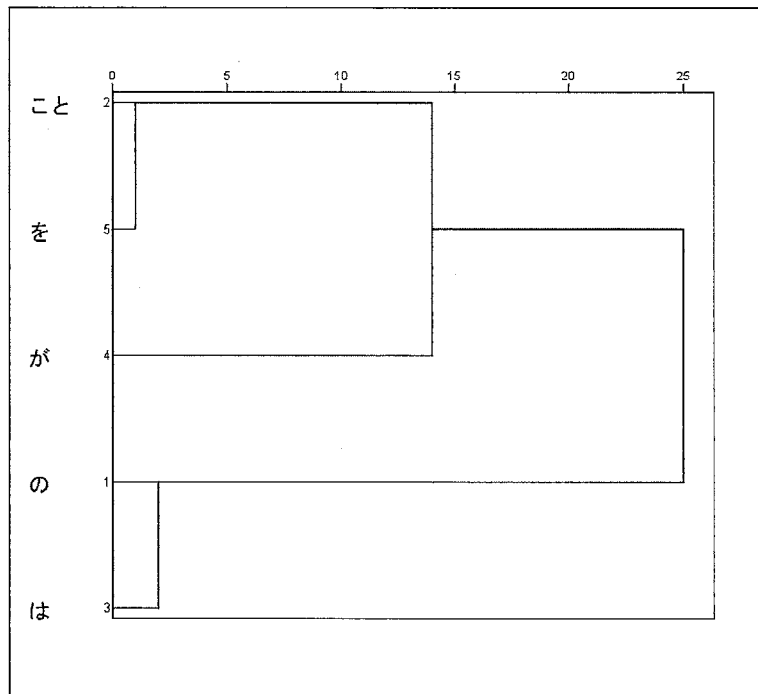


図3 BTSの「の」「こと」と助詞のデンドログラム

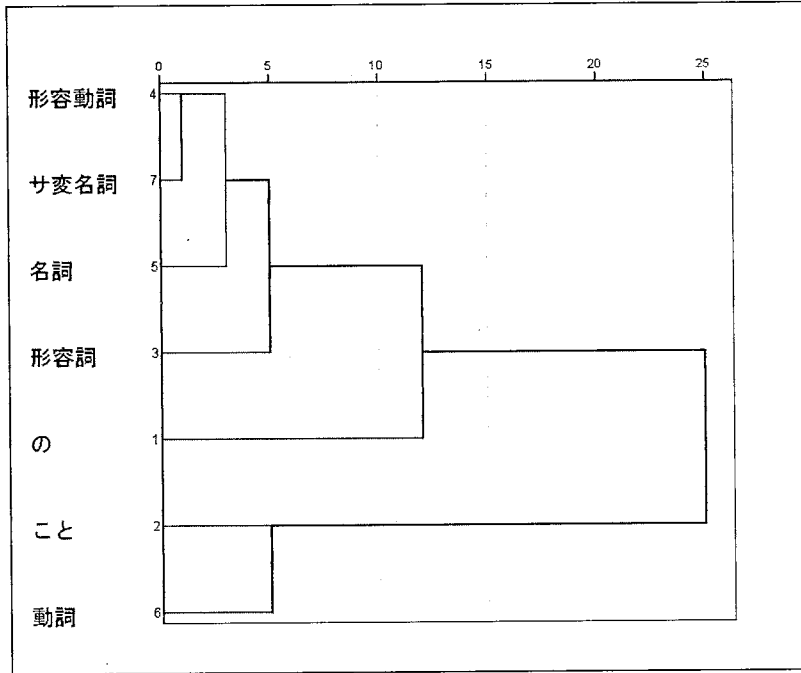


図4 BTSの「の」「こと」と品詞のデンドログラム

